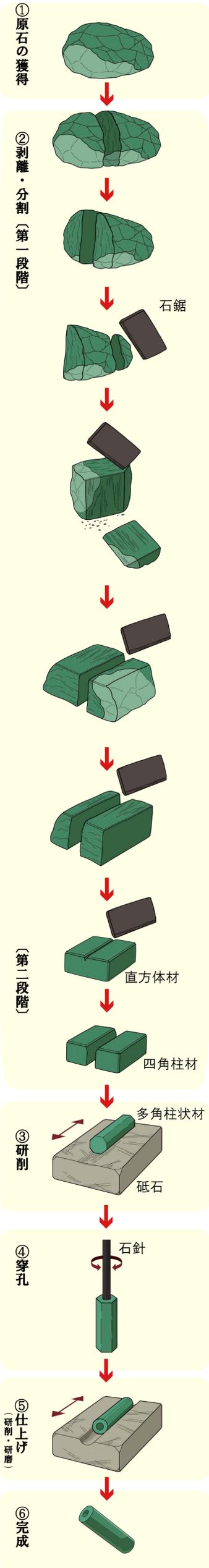


あ お や か み じ ち 青谷上寺地遺跡の玉作り

青谷上寺地遺跡の管玉の作り方
— 大中の湖技法 —



あ お や か み じ ち
青谷上寺地遺跡では、主に石川県産の碧玉・緑色凝灰岩を材料に管玉製作が盛んに行われており、関連する出土資料は約600点に上ります。管玉製作の手順は、石鋸で溝をつけて石を割る「施溝分割」によって、原石から直方体材、次いで四角柱材を作り出し、角を磨き落として管玉に仕上げます（左図）。この手順は、弥生時代中期（約2200年前）の北陸地方から山陰地方にかけてみられる「大中の湖技法」と呼ばれるものに共通しており、青谷上寺地遺跡で多用されている技法です。



青谷上寺地遺跡の玉作り関連資料

青谷上寺地遺跡が、弥生時代中期以降に交易拠点として発展する上で大きな意味を持ったのは「玉作り」です。この時期、北部九州の有力者の墓である甕棺墓には、北陸産碧玉製の管玉が多数副葬されており、青谷上寺地遺跡から北部九州へ運ばれた可能性があります。おそらく青谷上寺地遺跡の弥生人は、北部九州の有力者層が求めた管玉と引き換えに、海を越えてもたらされた貴重品である「鉄」を手に入れたのでしょう。北陸と北部九州との中間に位置する青谷上寺地遺跡は、自ら管玉生産を行いながら、玉と鉄が東西に行き交う日本海交易の中継拠点としての役割を担っていました。



石針と管玉



弥生時代中期中葉から後葉の玉作り資料から見る交流